

2016 年度立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業

— 東北応援ツアーレポート — (宮城県)

参加者氏名： 徳永一三

卒業年： 1968 年

卒業学部： 経済学部

「現地を応援して思うこと」

私は 11 月 19 日（土）～20 日（日）の宮城県コースに参加させてもらった。東北応援ツアー参加は、昨年の岩手県コースに続いて 2 回目である。私は 72 歳で、このコース参加者の中で卒業年次が一番古かったので、最年長であったかもしれない。

今回も、被災地を自分の目で見ることで、そして心身ともに大きな災難に遭いながらも、復興に向けて立ち上がっておられる校友の皆さんの体験を伺うことは、自分の生き方を自省し、自分が果たせるものまだあることを自覚する貴重な時となった。

第 1 日目の南三陸プラザでの勉強会で、気仙沼向洋高校岸教諭から、5 年前の 3 月 11 日の巨大地震と津波襲来時、当時勤務していた志津川高校での体験を聞く。そして今も宮城県防災教育研究グループの一員として「防災教育スタートパック」を開発し、小学校・中学校・高校・特別支援学校の子供たちが、防災の大切さを一貫して学べる体制作りを推進しておられるとのことであった。体験談の中で志津川高校のすぐ下にある特別養護老人ホームの惨状も語られた。勉強会后、女川町に向かうバスの車窓から、女子職員が最後まで防災無線で避難放送を続けた南三陸町防災対策庁舎の鉄骨むき出しの建物、志津川高校と特別養護老人ホームが見えた。いづれも被災直後、テレビで何度も何度も見た風景であるが、17 年間老人ホームで事務職として働いていた私にとって、高校下の老人ホームの話と建物は特に印象に残り、被災した入居者、及び職員に思いを馳せた。

バスの中では、河北新報の防災担当記者の大泉さんから、河北新報は東日本大震災以前から「防災報道」を新聞社の使命の一つと据え、防災担当記者を配置してきたこと、現在は「いのちと地域を守る」をテーマに、この大震災の教訓を伝え、住民と一緒に地震・津波対策を考える巡回ワークショップ「むすび塾」を全国的に展開し、また全国の大学生に呼びかけて「記者と駆けるインターン」を開催し、学生に被災地の中小企業を取材する中で実社会に触れ、コミュニケーション力を高める場を提供し、4 年間で 267 人を受け入れていること等を聞いた。昨年の岩手県コースの三陸鉄道「震災学習列車」の車中で聞いた、三陸鉄道の働きと同様、地元住民への貢献のみでなく、全国に視野を広げた防災活動を組織全体で行っておられることに感銘を受けた。

1 日目の夜のホテル大観荘での勉強会では、名取市の「ささ圭」専務の佐々木さん、石巻市の「木の屋石巻水産」社長の木村さんの講話を伺う。佐々木さんは、津波で本社・支店・自宅をすべて失い、残ったのは借家の売店のみで、当初は廃業も決断したと語ら

れた。そうした中、自分たちには「両手」がまだ残っていることを思い起こし、両親から手作りの製品の作り方を学び、改めてかまぼこの原点を教えられ、地域に根差した伝統を蘇えさせる決心を与えられたと語られた。また、地元の「閑上（ゆりあげ）地区」は住民の 5 分の 1 に当たる 800 名を超える方々が津波の犠牲となられ、世界中に「地図から消えた街」と発信されたが、住民は現地再建を選択し、今は嵩上げ工事も終わり、既に水産加工会社が数社進出してきたこと、次代を担う子供たちのために小中一貫校が計画され、9 年間防災学を学べるカリキュラムを作っていること等も紹介された。

缶詰工場を経営しておられる木村さんは、震災直後は「もうこれで事業の心配をしなくていい」という心境にあったこと、しかし従業員から「再建しましょう、その道を研究しましょう」という強い願いに動かされ、励まされ、今は海岸近くと内陸部に工場を新築して事業を再開し、今年は震災前の生産に戻るまでになったことが語られた。

それぞれに企業の経営と共に従業員の生活を守る責任を果たすため、5 年間で何度も重い決断をされた体験談は、私の想像を超えたもので、何度も涙腺が緩んだ。

第 2 日目は、松島港から塩釜港まで約 1 時間、観光遊覧船から津波で被災した沿岸を見ることができたが、海苔や昆布の養殖事業も徐々に復活しているように見えた。

午後は、名取市閑上地区の小高い丘にある「閑上の記憶」という施設で、被災体験の語り部松崎恵理子さんの話を聞く。松崎さんの父上は今だ行方不明であるが、自身のつらい体験を、漸く昨年から公の場で語ることができるようになったそうで、涙なしに聞くことができなかつた。私は幸いにも松崎さんをモデルとした童話「マンホールのステージ」を買い求めることができた。早速教会学校や保育園の子どもたちには是非読み聞かせてもらおうと思っている。その施設の向かいに被災地を一望できる日置山があり、そこでツアー参加者一同で黙祷ができた。また名取市で津波の犠牲になった方々の名前が記された慰霊碑も訪ねることができた。

ツアーの最終地は佐々木さんご夫妻の経営の「ささ圭」の売店であった。当日は定休日にも関わらず、ご高齢の両親とご子息が焼きたてのかまぼこを私たちにふるまうため、店先に炭火を焚いて待ち、またかまぼこを作るところをガラス窓越しに見せていただいた。

今回、話をして下さった方に共通して感じたことは、自分たちは 5 年前、巨大な地震・津波で親しい多くの人を失い、甚大な被害を受けたが、日本のみならず世界の人々に防・災の大切さを心に刻み、その備えをしてほしい、それを伝えたいとの熱い思いであった。

今回のツアーも地元校友会の皆さんが私たちを心から歓迎し、多忙な中を 2 日間のバス同乗や、時間を作って勉強会・交流会に参加下さり、温かい交流をしていただき、本当にありがとうございました。また郷友会事務局の皆さんの周到な準備とお世話に紙面を借りてお礼申し上げます。